

# 日本ブロンテ協会 2025 年大会報告記

松井 豊次

(大同大学名誉教授)

日本ブロンテ協会 2025 年第 40 回大会は 10 月 11 日（土）、松蔭大学厚木森の里キャンパスにて、立正大学准教授工藤紅氏の総合司会のもと、東北大学名誉教授鈴木美津子氏の開会の辞で開幕した。

午前の研究発表前半では、中央大学教授大田美和氏の司会のもと、大阪府立豊中高等学校教諭音部みはる氏の「『ジェイン・エア』と『嵐が丘』—3 人の語り手たち」と、北海道大学大学院博士後期課程、行田英弘氏の「ネリー・ディーンの語りのレトリック—呼称・呼びかけに着目して」の発表が行われた。音部氏は、語り手が一人称で没入感がありわかりやすい『ジェイン・エア』に対して『嵐が丘』の語りの中に読者が入り込みにくいのは、内向的な作者エミリが自身の投影を隠すための試みではないかと指摘し、『嵐が丘』の構造の複雑さは、読者を引きつけるための技巧である可能性を指摘された。行田氏は、ネリーが他の登場人物をどのように呼んでいるかという視点から考察された。呼称と呼びかけが不一致である場合は、ネリーが事態を外から眺める語り手としてのまなざし、一致する場合は、事態を内から眺める登場人物としてのまなざしが前景化されていて、呼称・呼びかけのレトリックは、ネリーが言葉の力で物語世界を生き抜く上で、重要な認識的枠組みを提供していると指摘された。

研究発表後半では、滋賀大学名誉教授岩上はる子氏の司会のもと、同志社大学嘱託講師石井昌子氏による「ルーシー・スノウの 2 つの恋—『ヴィレット』再考」と、東京科学大学准教授猪熊恵子氏による「『ジェイン・エア』と『サルガッソーの広い海』—ベッシーとクリストフィーヌ」の発表が行われた。石井氏はルーシー・スノウのドクター・ジョンとムッシュー・ポールに対する 2 つの恋心は、選択の問題ではなく、ナショナリズム批評とフェミニズム批評を併せて考えるのが合理的であり、両者の交錯点において、沈黙という能動的な語りの形を通して描かれたアイデンティティの探求であると結論づけられた。猪熊氏は、リード家の召使いベッシーは、孤児ジェインに優しく寄り添うようであり、常にクリティカルな価値判断を与える、厳しい立ち位置の女性であると結論づけられた。

午後の部では冒頭に、松蔭大学コミュニケーション文化学部長石上七鞆氏の会場挨拶を、大会委員長阿部美恵氏が代読された。始めに総会が開かれ、日本ブロンテ協会会長栗栖美知子氏から、協会 40 周年を迎えての挨拶が行われ、事務局から、役員人事、年間活動報告、第 41 回大会、会計および会計監査報告、2026 年度以降の財政立て直し、および岩崎書店からの絵本の監修依頼について報告があり、すべて承認された。続

いて、大会委員長の松蔭大学教授阿部美恵氏からの挨拶の後、日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長である早稲田大学名誉教授木村晶子氏より奨励賞報告が行われたが、本年度は応募がなく、奨励賞なしと報告された。

休憩を挟み、上智大学教授小川公代氏の司会のもと、武庫川女子大学教授玉井 暉氏による講演「語り手の領分—『ジェイン・エアの場合—』」が行われた。玉井氏は、作品の語りの基本構造を独白、対話、会話に分類して論じられ、登場人物ジェインの信条が作者シャーロット自身の信条に変容しているというヴァージニア・ウルフの批判を踏まえて、ファンタジーの世界とリアリズム的物語世界が併存している結末になることによって、『ジェイン・エア』が小説たり得ているのではないかと結論づけられた。

次のシンポジウムは、「シャーロット・ブロンテとアート—2020年代の視点より—」というタイトルのもと、東京藝術大学教授佐美真理氏の司会で開かれた。始めに明治大学専任講師大澤舞氏が「『ジェイン・エア』における懇願の語りと女性たちの応答」の題目で、ジェインとバーサの間のコミュニケーション回路存在の可能性を創造することが、シャーロットの「懇願する語り」というアートの特殊性であり、次の弘前大学准教授畑中杏美氏は、「女性の人生と孤独：シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』とマーガレット・ドラブル『滝』における創作活動の効用」と題し、両作のヒロイン、ジェインが、絵画、詩や散文の物語といった創作活動に勤しむことで、ネガティブな影響をもつ孤独を、ポジティブなものに変える生きるコツを持っていたのではないかと考察された。続いて武庫川女子大学准教授西山裕子氏が「『ジェイン・エア』にみる音と芸術（アルス）との重なり」と題し、ジェインとロチェスターが音によって結びつく過程で繰り返される芸術（アルス）のモチーフとその意味を作品の場面を重ね合わせながら検証し、音の反復が重要な役割を果たすことを、最後に司会の佐美真理氏は「『ジェイン・エア』における身体の「アート」」と題し、ロチェスターとジェインの超自然的なテレパシー的能力は、マイムやバレエといった一見かけ離れた古典的身体言語の延長上にあることを考察された。

京都大学国際高等教育院副教育院長廣野由美子氏の閉会の辞により 2025 年大会は閉幕した。大会参加者は 43 名（会員 41 名、非会員 2 名）、早稲田大学名誉教授木村晶子氏の司会のもと開かれた懇親会には 24 名が参加された。開催校をお引き受けくださった阿部美恵先生、松蔭大学の皆様、大会をお世話くださった先生方、遠方からご参加された皆様に深く感謝申し上げます。